

東京帝國大學經濟學部內 東亞經濟研究所

年四回(二月、五月、八月、十二月)發行

# 東亞經濟叢論

第參卷 第一號

昭和十八年二月

イギリスの支那進出と重商主義……………經濟學博士 高垣寅次郎

唐代民間に於ける度量器使用習慣の實情と布帛測定尺の一實例……………文學博士 那波利貞

東印度外國商業の特質……………經濟學博士 目崎憲司

唐代の貨幣思想……………經濟學士 穗積文雄

中國紡績事業の性格と日華經營の對立……………經濟學士 西藤雅夫

支那製絲業の生産形態……………經濟學士 堀江英一

支那紡績勞働力の質的吟味……………經濟學士 岡部利良

(禁轉載)

書肆 有斐閣 發賣

## 支那紡績労働力の質的吟味 (一)

——支那工業労働力の質に關する一研究——

岡 部 利 良

### 一 問題の所在

一、課題 労働力を質及び量の二つの面から見るとき、支那近代工業（工場制工業）に於ける労働力の特質は、量的には、その供給力が極めて豊富であるのに對し——或ひはむしろ豊富（過剰）であるが故に——質的には未だ低位にあり、近代的工業労働力として成熟してゐない點に求められる。この労働力の低質性は——生産手段、特に労働手段の質的（並びに量的）未發達と相俟つて——この國の近代工業の發達を阻害してゐる、直接的な（更にヨリ基礎的な根據を置く措くと言ふ意味に於いて）基本的一要因をなすものである。このことは、そこでは、労働力の低質性の故に、労働の生産性は必然的に低位におかれ、一つには（而かもそれは重要な）、かゝる事實が、支那近代工業發達の基礎を劣弱化せしめてゐることから知られる。ことに、支那近代工業に於ける労働力の質が問はれなければならない重要な根據が存在する。<sup>(註)</sup>

1) これらの點については、拙稿、支那工業労働の低生産性、經濟論叢、昭和17年1月、pp. 77-82 參照。

(註) この場合、労働力の低質性は、低賃銀とも重要な関係を有つてゐる。勿論、支那工業に於ける低賃銀は、單に労働力の低質性のみによるものでないことは明かであるが、然しこの低質性が、低賃銀の重要な一基礎をなしてゐることは、否定しえないところである。

支那近代工業に於けるこの労働力の低質性は、勿論、支那——當の近代工業、更に廣くは支那社會・經濟——に於ける一定の社會的・經濟的根據に基づくものであり、我々の課題とすべき問題もこれらの點に存在する。そしてまた歴史的には、この低質性は、支那近代工業の、更に廣くは支那社會・經濟の後れた發達段階に照應するものであり、従つてそれは、近代的工業労働力の、言はず初期的低質性として見られるものである。自らまた問題は、かゝる歴史的視角の下に捉へられなければならない。こゝに支那の場合に於ける労働力の低質性と言ふは、右の事實からも明かなやうに、勿論、先進工業國との比較に於けるものが意味されてゐる。

支那近代工業の主導的部門であり、その歴史も必ずしも短くない綿絲紡績業（謂ゆる兼營織布業をも含む、以下、單に紡績業と言ふ。紡績の語もこれに準ず）——たゞし、その創始期は西歐諸國から見れば、勿論遙かに後れてはゐる——に於いても、そこに充用される労働力は、右の如き關係と同様の關係におかれてゐる。即ち、こゝに於いても、一般に充用労働力の供給は豊富（過剰）にしてその取得は容易であるのに對し（但し無條件にさうばかり言へないことは注意されなければならない）、その質の低位は等しく認められるところである。そこに於ける問題の基本的な所在も、右に指摘したところと異ならない。むしろ、紡績業に於ける労働力は、この國の近代的工業労働力の一般的特質を、そしてまたその低質性を、最も明白に示す一つの代表的なものとしてあげられる。特に紡績労働者の場合、その特殊性、即ち、彼等の多くは農村より供給される謂ゆる出稼型（このことは、支那の近代的工業労働者の重

要な一特質をなすものであるが、紡績労働者に於いてはそれがヨリ顯著に見られるであらう)の家計補充的女子労働者にして、而かもその労働条件(労働時間、賃銀等)は一入劣悪なる點に於いて、その労働力は——支那近代工業自體に於いても——精神的にも肉體的にも、恐らく一そう低位におかれざるをえないと言ふ如き事實の存在することは、これを認めなければならぬであらう。然し、實は、かゝる事實こそ問題であると共に、また支那に於ける紡績労働力の低質性は、單に、この工業に於いて特に顯著に見られる右の如き特殊性のみを以つて説明されるものではない。こゝに特殊性と言ふも、それは相對的なものに止まり、そして紡績労働力の低質性も、右に指摘する如く、更に——他の近代的諸工業に於ける労働力低質性の根據と等しく——ヨリ一般的・基本的な根據に基づくものである。かゝる意味に於いて、支那紡績労働力の質的吟味は——その特殊性は考慮されなければならないとは言へ——同時に、この國の近代的工業労働力一般の質的吟味に關する問題にも一應答へうるであらう。またこのことは、紡績業がこの國の近代工業の主導的部門たる點に於いて、特に、重要な意義を有つものである。

こゝに課題とするところは、右の如き觀點の下に、支那紡績労働力の——自らまた労働の——低質性について、その事實並びにその根據をなす社會的・經濟的諸關係を明かにすることにあるが、個々の問題に入る前に、豫めこゝに對象とする労働力の質的構造並びに紡績労働力の意義に關し、若干の基本的な問題點を明かにしておかなければならない。

二、労働力の質的構造について 労働力は、言ふまでもなく、生産手段と共に、生産の基本的要素をなすものである。それは、生産手段が客體的條件であるのに對し、主體的條件として、生きた人間の個體のうち可能

的・潜在的に存在して居り、そして生産過程に於けるその發現・展開が、謂ふところの労働である。従つて、労働力の質は、一般に、同時に労働の質に反映されるが、のみならず、生産上に於ける労働力の質の測定・吟味は労働を通じてはじめて行はれる。而かも現實には、労働力は、生産手段との結合の下に於いて、それと統一的に機能するものであり、こゝに謂ゆる實際作業（現實の労働過程）の下に於ける労働力の測定・吟味に於いては——特にその場所的比較の場合には——諸條件の複合の故に、ヨリ複雑な關係が生ずる。

我々のこゝに問題とするところは労働力のかゝる（内包的）質の吟味であるが、本來、労働力（労働能力、作業能力）は、これを質的に見るとき、精神的（知的・意志的）・肉體的（生理的）諸能力から成るものである。而かもこれらの諸能力は、有機的な總體として存在し發現するものであり、従つて、それは先づかゝるものとして把握されなければならぬ。然しまた、これらの精神的能力と肉體的能力（或ひは單に體力）は一應分化して發達・發現することも事實であり、それ故この兩者は分つて見られなければならない。更にこの精神的能力は、（生産）技術的能力（智能——技能）と、謂ゆる労働意志（或ひは労働心・作業意志）なるものに分かち得るであらう。（生産）技術的能力は、それ自身智能の一部をなすものであると共に、且つ一般に智能と極めて緊密な關係にあるものであり、それ故そこでは、特に智能水準が重要な役割をなしてゐる。また労働意志は、一般に労働力（この場合、技術的能力及び肉體的能力）の發現を（或ひは形成をも）規定する要因として重視されるものであるが、それに關して問題となるところは、かゝる意志・意志活動の強弱如何についてである。同時にこの場合に於いても、智能が重要な意義を有つてゐることを看過しえないであらう。肉體的能力については、こゝでは、これを労働力の一構成能力として指摘し

2) 以下に於いて、労働能力と言ふ場合、それは労働力を質的に捉へてゐることを意味する。

ておくことを以つて足りるであらう。

労働力が右の如き存在として把握されることから、労働力の（内包的）質的吟味に於いては、少くとも精神的能力に於ける技術的能力及び労働意志と、更に肉體的能力が、一應それ／＼分つて考察されなければならない。<sup>(註)</sup>また現実的にも、かくすることは、問題の解明に役立つであらう。以下に於いて、これらの三者を、一應それ／＼個別的に取上げるのも、かゝる理由からである。

(註) 然しながら、この場合、これらの各能力を、具體的に正確に捉へることは、対象の性質上當然一定の制約を受けざるをえない。また我々にとつての問題は、實際、作業の下に於ける労働力の質であり、それは、労働過程を通じて或ひは労働の結果に於いて把握されるものであるが、この場合には、生産の諸條件が相複合して作用するため、右の制約は更に大である。殊に支那の場合に於いては、右の諸能力に関する科學的方法による調査乏しく、従つて我々の課題とするところの問題の解明にも一入困難を感じざるをえない。

また如上の労働力の質的構造については、更に理論的な分析を必要とするが、それを主題とすることはいまそのところではなく、ここでは、一應右のやうな關係に於いて労働力の質的構造を捉へ、これを、以下の問題の展開上、必要な限りに於いて指摘しておくに止めておかなければならない。

三、紡績業に於ける労働力の質的意義 更にこゝに言及しておかなければならないのは、生産手段、特に労働

手段との對比に於ける労働力の質的意義についてである。一般に生産方法の上に於いて、近代工業以前の段階に於ける諸工業にあつては、労働力が起點をなしてゐるのに對し、近代工業に於いては、労働手段（機械）が起點となり、労働力は、その從屬的・隷屬的な存在とされてゐる。そしてこゝに、近代工業に於ける労働力の有つ意義の限界が存在する。然しながら、この場合に於いても、勿論、労働力は、依然として、或る意味ではむしろヨリ

重要な、一定の基本的な役割を有つてゐるのである。このことは、機械の進歩・發達、それによる労働過程のスピード化・精密化等の事實によつて、必然的にまた、そこに適應する新たな一定の質的水準を有つ労働力が要求されてゐることを知れば明かである。そこでは、労働者は、決して機械に對する單なる『生きた附屬物』ではない。特に今日の支那の場合には、近代工業に於いても、先進工業國に較べ人間の労働力の有つ意義は一そう大である。<sup>(註)</sup>それ故そこでは、労働力の質の吟味は、ヨリ重要な課題をなしてゐることを、併せて注意すべきである。

(註) このことは、支那の近代工業に於いては、今日なほ、機械に代つて人間の労働力が充用されてゐることの少ない事實に現はれてゐる。この點について、例へば方顯廷氏は「支那の工業化の顯著な特徴は勿論種々存在するが、人力を重んじて機械の利用を輕んずることは特に著しい特徴である」と言ひ、またト・ネイも支那の工業化に關し「支那の住民の最も重大な經濟的缺陷——それは極めて重大な缺陷である——は、人口過剩のために、人間の労働が廉いことであり、その結果、労働がもつと高價であつたならば既に早くから用ひられてゐたはずの機械の採用が、妨げられてゐる」と述べてゐる。

かゝる事實は、我々の當面の對象たる紡績業の如き、輕工業にして、そこに於ける充用労働力に對しは、それほど高度の熟練や強力な體力を必要としない場合に於いても、決して例外をなすものではない。そこでは、労働過程は殆んど機械化され、労働力の役割は一段と背後におかれてゐるとは言へ、然し、労働力の質がやはり重要な意義を有つてゐることは、勿論否定されない。<sup>3)</sup>このことは紡績業に於いても、労働力の質的良否が、生産上に重要な關係を有つてゐる現實の事實が明かに示すところである。

先づ、この工業の労働力に於いてヨリ重要な役割をなす技術的能力について見るとき、労働者のなす作業の主要部分は手の(特に指先の)労働による比較的單純なものであり、且つその習熟も比較的容易な部類に屬するもの

3) 方顯廷, 中國之工業化與鄉村工業(方顯廷編, 中國經濟研究, 下, 民國27年所收), p. 620.  
4) Tawney, R. H., Land and Labour in China, 1932, p. 135; 浦松佐美太郎・牛場友彦譯, 支那の農業と工業, p. 148.

ではあるが、然しながら、なほそこに於いても、作業の熟練・技術的能力の向上は、労働力の質、更に一般に労働者の智能水準と密接な関係を有つてゐることを見逃しえないのである。<sup>(註)</sup>かゝる事實は、我々の當面の問題として、特に注意されなければならない。然るに、支那の紡績労働力に於いては、先づこれらの點に問題が存在する。

(註) このことは、一應人々の推知しうるところでもあらうが、現にまた、從來専門家の手になる種々の調査研究の結果から明白に確認される。桐原葆見博士によれば、同氏自身で行はれた、日本の女子紡績労働者に於ける適性検査と實際作業との關係について、労働者の技術的能力の智能に依存することの多いことが断定されてゐる。即ち同氏は、例へば智能と紡績作業の習熟期間との關係について『……或る一定の程度の作業能率に達するに要した……所要日数の短いものは、テスト(適性検査——引用者)成績に於いて高く、順次長時間を要したものは、テスト成績が低い。これによつて、このテストが、習熟の速さと高い相關々係を有することを知る』と言はれ、かくしてまた『紡績労働者について——一般的に見ても『少くとも、優秀な職工は低劣なものに比してその智能の低いことは瞭かであつて、若し優良な職工のみを得んとせば、智能の低劣なものを排除する必要がある』と結論されてゐる。或ひは更に、日・支紡績労働者に見られる技術的能力の差も(後述)、兩者の智能水準の差によるところの少くないことは——現に筆者が直接質したところによれば——労働管理の當事者によつて一般に認められてゐるところである。但しこれらの點については、異論も存在しないわけではない。オーティスの行つた紡績労働者の智能検査によれば、智能と實際作業との相關々係は極めて低いことが見出されたと言はれ、従つて彼に於いては『現今の紡績作業に於いては、智能は不必要であるばかりでなく、反つて着實勤勉に規則的仕事に従事するの障礙となり、時に能率を低下せしめることすらあるのである』<sup>5)</sup>とさへ極論されてゐる。然しこの場合、オーティス自身にあつても、この立論に對する基礎資料の不足が認められてゐることは注意されなければならない。桐原博士は、前記の如き自身の手で實證された事實によつて、このオーティスの見解を否定されてゐる。そしてここに、我々もまた、紡績労働に於いても、智能・技術的能力・労働力——労働生産性なる一聯の關係に於いて、それ／＼のものが、極めて密接且つ重要な意義・關係を有つてゐることを知るのである。

紡績業に於いても、労働力の質的意義は、然し、勿論單にかゝる技術的能力のみに存在するのではない。こ

5) International Labour Office, The World Textile Industry, Vol. I, 1937, p. 24.  
6) 桐原葆見, 新訂勞務管理, 昭和13年, p. 155.  
7) 桐原葆見, 産業心理學, 昭和13年, p. 139.



のことは、一般的に言ひうるやうに、既に明かであり、即ち労働力の質については、先きに指摘した如く、更に労働意志、肉體的能力等の如何が問はなければならない。然るに労働意志については、支那紡績労働者（更に廣く支那の近代的労働者）の場合、積極性を缺くと屢々言はれ、現に彼等に關する『怠惰』説に接することが少くない（但し異論も見出される。これらの點については、後に取扱ふところである）。この事實はまた、支那近代的労働力の初期的低質性の一つの現はれと見られるのであるが、何れにしても、それは、彼等の労働力低質性の一部を説明するものである。そして現に、このことの故に彼等の労働は規制され、ひいてそれはまた、労働生産性低位の一要因をなしてゐるのである。こゝに、支那紡績労働者の労働意志に關する吟味の意義が存在する。

更に、肉體的能力は、重作業の工業に於いては、勿論ヨリ強く要求されるところであるが、一つには強力な肉體的能力を要しないと云ふ點に於いて、早くから女子労働者や幼年労働者の充用を可能ならしめてゐる紡績業（一般に繊維工業）に於いても、なほ、この肉體的能力の有つ役割は單純に輕視しえない。會つて、シエルトゥーギー（*Sierstueger*）は、その紡績業の研究に於いて、ランカシアの紡績業が、歐洲大陸のそれに優越し競争力を大ならしめた一主要因は、前者の労働者の有つ肉體的能力のすぐれてゐること（*physische Ueberlegenheit*）にあつた、と述べてゐる。<sup>10)</sup>もとゞ資本の下に充用される機械にあつては、その發達による作業の『單純化』は必ずしもそのまま労働者の肉體的能力の必要を輕減せしめるものではない。そして現に紡績業に於いても、そこではそれほど健全な肉體的能力を必要としないとは言へ、然し、その如何が作業上に有つ意義は必ずしも少くはない。然るに、殊に支那の場合には、労働條件（従つてまた生活條件）の劣悪なことは、ひいて労働者の肉體的能力に障害的影響を

8) 9) 桐原葆見, 産業心理學, p. 139 による。

10) Vgl. Schulze-Gavernitz, G. v., Der Grossbetrieb, ein wirtschaftlicher und sozialer Fortschritt, Leipzig, 1892, SS. 173—183.

與へるところ決して少くないはずである。實際には、彼等の肉體的能力の如何については從來充分明かにされてゐるとは言へず、むしろ相對立する種々の異論の存するところであるが、然し、諸々の事實の示すところによれば、それがすぐれてゐることを肯定することは困難のやうであり、こゝにもその低位を認めざるをえないであらう。そしてこのことが、労働過程に影響するところは、また單純に見逃しえないところである。かくして彼等の肉體的能力の吟味は、こゝにまた重要な一箇の問題をなしてゐる。

その労働過程に於いて、すぐれた労働力を必要としないと言はれる、代表的な一部をなす紡績業に於いても、労働力の質の意義は、なほ右に見る如くであり、それは正しく評價されなければならない。労働力の質が劣る場合、その下に於ける生産が、多かれ少なかれ阻害されざるをえないことは既に自明のことである。そして現に、支那紡績業（特に支那人紡績）に於ける労働生産性が低位におかれてゐるのも——従つてまたこの工業の發達が阻害されてゐるのも——直接的には、その主因の一つは、正に、そこに於ける労働力の低質性にあることを見逃してはならぬ。

（註）方顯廷氏は、支那人紡績の發達を阻害してゐる主要な經濟的要素として三個の原因をあげ、その一つとして『労働の非能率性』を問題としてゐる。（他の二つの要因とは、資本の缺乏と劣悪な管理方法である）<sup>11)</sup>

支那紡績業に於けるこの労働力の低質性は、支那近代工業一般に於いてさうであるやうに、特にその精神的能力——技術的能力においても、労働意志に於いても——の劣ることに見出される。肉體能力に於いても——その評價に關しては更に吟味を要するとは言へ——それが多かれ少なかれ劣つてゐるであらうことは、右に指摘する。

11) Fong, H. D., Cotton Industry and Trade in China, Vol. I, 1932, pp. 317-320.

如く、否定されないやうである。何れにしても、これら兩者の總體たる勞働力について見れば、その低質性は、争はれないところである。

それでは、その質の低さは如何に現はれて居り（その具體的な程度については、ここでは主として技術的能力に關して述べるに止めざるをえない）、更にそれを規定してゐる社會的・經濟的根據はどこに求めらるべきであるか。問題は、これらの點に存在する。以下、それは、（一）技術的能力、（二）勞働意志、（三）肉體的能力、に分つて取扱はれるが、我々は、そこに、支那紡績勞働力の低質性に見る支那的な特質を知ることができらうであらう。

## 二 技術的能力の未成熟性

### （一）技術的能力の低さ

一般に廣く支那の勤勞者の有つ生産的な精神的（知的）能力或ひは技術的能力が問題とされる場合、後にも述べるやうに、彼等の『聰明さ』や『器用さ』が、屢々語られ、また賞讃さへされてゐる。然るに、これを近代工業、ひいてまた紡績業に於ける勞働者について見るとき、その精神的能力或ひは技術的能力の低さは、これを蔽ふべくもない。聰明・器用と言はれる支那の勤勞者が、一たび近代工業勞働者となると、低技能者として現はれてゐることは、こゝに問題の存在することを示すものであるが、この點については、後に論及するところである。

一、測定・資料の有つ限界　こゝに先づ明かにされなければならないのは、當の紡績勞働者に於ける技術的能力の低さの程度である。この程度は、言ふまでもなく、何らか他との（いまの場合、先進工業國との）比較に於け

る相対的な位地を示すものでなければならぬ。然しこの程度を、こゝに科學的な正確さを有つ測度を以つて示すことは——對象の性質と、更に據るべき資料の缺如の故に——極めて困難であり、従つて、いま我々は、その近似的な或ひはむしろ極めて概略的な位地を知ることとを以つて満足しなければならぬ。かゝる技術的能力の比較は、一つには、産業心理學的検査(適性検査)の結果によつて、その判断の基礎を與へられるが、然し、支那の紡績労働者については、かゝる試みは殆んどなされてゐないやうであり(このこと自體また注意を要するところである)。——私の知りえた限りでは——僅かに次に示す如き事例をあげうるにすぎない。従つて、こゝに利用しうる資料も、主として、實際作業に於ける當事者の經驗的な結果或ひはその他の若干の調査結果によるものである。然しこれらのものは——それが實際作業に於いて得られたものである點に於いて、我々にとつてはむしろ意義を有つものであり——こゝに問題とするところに對しては、一應充分役立つであらう。<sup>(註)</sup>資料の關係上、比較の對象は、主として日本に於けるものにおかれてゐるが、以下、支那紡績労働者の技術的能力の位地に關する若干の事例を示す。

(註) 然し實際作業の場合には、既に指摘した如く、勿論、單に技術的能力ばかりでなく、特に他の種々の諸條件——労働力に於ける労働意志、肉體的能力のみならず、更に労働手段、労働對象等の對象的諸條件——が相關聯して作用するため、事態を一そう複雑ならしめる。それ故、技術的能力を幾分でも正確に把握し比較するには、これらの他の諸條件をできるだけ一定としなければならないが、このことは、國際的比較の場合、一段と困難を加へる。従つてまた、以下の事例に於いても、これらの他の諸條件が、多かれ少なかれ複合的に作用してゐることを考慮しなければならない。

## 二、低さに關する指標・見解

(1) 労働者の技術的能力は、右に指摘する如く、一つには、彼等につらての

適性検査によつて測定・評價されるが、支那紡績労働者に關するかゝる検査の事例としては、上海の公大紗廠（鐘淵紡績上海工場）當事者によつて行はれたもの（検査の時期、昭和十二—十三年）がある。たゞしこの検査の結果についていま我々のこゝに示しうるところは——所與の資料の簡単なことのために——僅かなものに止るが、そこには、日・支女子紡績労働者（人員各一〇〇人）の適性検査の結果が極めて概括的にはあるが與へられて居り、これによつて、一應、これら兩者の技術的能力の比較を知ることが出来る。検査の結果によれば、支那の労働者は日本の労働者に較べ、指先の動作の如きは僅かながらすぐれてゐるが、その他の能力は概ね劣つてゐると言ふ。即ち『目と手の協同動作』に於いては、日本人一〇〇に對し、支那人一〇三となつて居り、そしてこのことから後者の指先の動作が多少上位にあることが判断されてゐる。然し、記憶力、注意力、活動力、模倣力、學習作用等の綜合的結果は、日本人一〇〇に對し支那人は僅かに八〇にしかすぎない。こゝに知りうるところはこの程度で不完全なものではあるけれども、これらの事實によつて、支那紡績労働者の智能・技術的能力が概して低位にあるだけはほゞ理解しうるであらう。更に右の検査による總括的な結果として、検査人員一〇〇人を五クラスに分かち、次の如き比較が示されてゐるが、見る如く、支那労働者の方に概して低能力者のヨリ多いことが知られる。

日・支紡績労働者の『綜合的技術・労働能率』の比較（人）

	A 級	B 級	C 級	D 級	E 級	合計
日本人労働者	五	一〇	七〇	一〇	五	一〇〇
支那人労働者	二	七	七〇	一三	八	一〇〇

支那紡績労働力の質的吟味

第三卷 一七一

第二號 一七一

1) 以上の事實は、當事者より提供された資料、並びに中支邦紡の再検討（大陸新報社主催、紡績工業座談會記事）、大陸新報、昭和16年5月27日による。

(備考) 上海公大紗廠調査、『入社より約一ヶ年間の作業練習期にあるもの、比較』にして、上方ほど高能力者。なほ、中支那紡の再検討、大陸新報、昭和十六年五月二十七日、参照。

もつともこの適性検査の結果は、單に一紡績工場の事實にすぎず、また検査の対象とされた人員も少いので(日・支各一〇〇人)、これが事實の一般性を示すものであるか否かはなほ考慮を要するところである。然し、こゝに與へられた結果から——それが極めて概略的なものであるにしても——日・支紡績労働者の技術的能力の比較について一應の判断はえられるであらう。

(註) 右の適性検査の結果に於いて、支那の労働者の方が指先の動作に於いて多少でもすぐれてゐることが示されてゐるのは、それが、紡績作業にあつては特に重要な一條件をなすものであることから見て、或ひは注意を要するであらう。このことは既に他の人々によつても指摘されて居り、なかには、支那紡績労働者の『手先の仕事などに至りてはとて日本の工女が眞似をなし能はざるほど巧者なるなり』<sup>2)</sup>とさへも言はれてゐる。また支那人織布工場(紡績工場兼營)に於ける各作業部門別の『能率』調査によつて見ても、専ら指先の手工的作業による『經通』の能率が、他の機械による諸部門に較べて良好なことが示されてゐるのは、やはり彼等の指先の動作が、比較的すぐれてゐることを意味するものゝやうである。但しこの點に關する日本紡績労働者との優劣については、我が在支紡績當事者の間にも見解は必ずしも一致してゐないやうであり——筆者が直接若干の當事者から質したところでは——現に種々の見方が行はれてゐる。また、支那の労働者の方がこの點にすぐれてゐるとしても、紡績作業に必要な労働能力は、勿論、單に指先の動作のみにあるのではないことは注意されなければならない。

(2) 右の事實は、支那紡績労働者の技術的能力の劣ることを示すものであるが、なほそれのみでは、實際作業に於けるその作用は知りえない。然し、この點こそ明かにされなければならぬものである。たゞ實際作業の場合、技術的能力のみを抽象してこれを的確に捉へることの困難なことは既に指摘したところであるが、この場合に於

2) 橋本奇策、清國の棉業、明治38年、p. 71.

3) 王子建・王鎮中、七省華商紗廠調查報告、民國24年、p. 139.

いても、所與の事實のうち、一應その判断の基礎は求められる。然し、從來示されてゐる、支那紡績労働者の技術的能力——この場合、これのみが問題にされてゐるとは言へないが、少くとも、そこに中心がおかれてゐる——に關する事實或ひは人々の見解を見ると、それらは必ずしも一致して居らず、むしろ相反するが如き觀さへ呈してゐるのである。これらの見解は、大別して二つに分かちうるであらう。即ち、一方のものは、彼等支那紡績労働者の技術的能力を、高く或ひは少くともさう劣るものではないと評價してゐるのに對し、他方のものは、現にそれが低いことを承認してゐるのである。前者に屬する見解は、支那紡績労働者の有つ技術的能力を、言はゞ積極的に認めてゐる點に於いて、重要な示唆を與へるものであり、單純に看過してはならないであらうが、然しそれはまた、部分的な事實を以つて一般的な事實となさんとするかの如き感を與へる點に於いて、危険性を有つものであり、そこに批判の餘地の存在することを注意しなければならぬ。

先づこの前者に屬する見解としては——現に一部の紡績技師の間には、織機の持臺數に於いて、優秀な支那の女工は、優秀な日本の女工と同數のものを受持ちうるとの見解や、或ひは精紡部に於ける生産性から見て、日・支兩紡績女工の間には全く差異を見ないと云ふ如き觀察さへ存在する。また一在支日本人紡績がその刊行物に記してゐるところによれば『坂本式優良織機にして、支那工人の手にて尙内地(日本——引用者)に劣らざる九十五パーセントの生産能率を發揮しえられる』<sup>4)</sup>と言ふ。このやうに、支那紡績労働者の労働能力或ひは技術的能力を、言はゞ積極的に認めんとする見解は必ずしも少くない。更に、例へば、先年(一九二九年)日本及び支那の紡績業を視察したペアースは、在支日本人紡績當事者の(あるもの)言として『支那人は、本來鋭敏な頭腦(quick brain)に恵ま

4) 戸田義郎、支那紡績労働の吟味、支那研究、昭和12年6月、p.107. 參照。  
5) 鄒春坐、救濟華商紗廠的先決問題、紡織週刊、第5卷第33期、p.740、但し、戸田義郎、前掲稿、p.107-108 による。  
6) 内外綿株式會社、内外綿株式會社五十年史、昭和12年、p.121.

れ、またその指先は器用であり』従つて『彼等は、適當な訓練を施せば、日本の紡績労働者と殆んど變らない』(圈點引用者)と傳へてゐる。<sup>7)</sup>そしてペアース自身も、彼等のすぐれた能力を認め、現在では、彼等はまだ日本の労働者に較べ非常に劣つてゐるが、然し『支那の紡績労働者は、機械的性向 (mechanical bent) を有つてゐるか、恐らく急速に進歩するであらう』<sup>8)</sup>と述べてゐるのである。同様の事實は、他の外國人によつても承認されて居り、このことを、トルガシェフは次のやうに書いてゐる。『支那の労働者は、規則的な機械工程によつて作業をなすべき方法を教へられるならば、教へられた通り正確にと言ふことは、大部分の外人製造業者が、支那に於ける經驗からして、異口同音に言明してゐるところである。何ら特別な筋力を必要とせず、また機械工程が正確に一律であるやうな若干の工業、例へば纖維工業の如きに於いては、支那の労働者は、ある場合には、西歐の労働者の殆んど九〇%の能率を發揮することが出来たと言ふことである。』(圈點引用者)。<sup>9)</sup>

これらの實際家や論者の示すこのやうな事實或ひは見解は、その限りに於いて、それ〴〵重要な意義を有つものである。然しながら、それが、今日、現實にどの程度一般的な妥當性を有つものであるかと言ふことは、なほ問題でなければならぬ。このことは、前記の敘述からも、一應讀みとりうるところである。支那紡績労働者の『能率』が、日本や西歐に於けるそれに劣らない、或ひは近いやうな状態に達しうるのは、現にそこに一定の條件が附されてゐる。實際家の一人は、この點について『適當な訓練を施せば』と述べてゐる。他方ではまた、右の如き高『能率』を發揮しうるのも『ある場合』のことであるとも言はれてゐるのである。他の人々に於いては、この『ある場合』のことが、宛も一般的な事實でもあるかのやうに(少くともさう思はしめるやうに)言はれてゐる。

7) Pearse, A. S., The Cotton Industry of Japan and China, 1929, p. 171.

8) Pearse, A. S., *ibid.* p. 221.

9) Torgasheff, B. P., Mining Labour in China, 1930, p. 52.



るが——そして現にまた、こゝに屢々錯誤が行はれてゐるのであるが——現實には、決してさうでないことを注意しなければならぬ。然しまた、右の實際家の言は、これを反面から見るとき、そこにすぐれた技術的能力を認められてゐる支那の労働者が、それを充分發揮しえないのも『適當な訓練』を缺くためであることを意味してゐる點は、これを見逃しえない。而かもこのやうな見方は、また現に少くないのである。勿論、この『適當な訓練』といふ條件は、労働能力或ひは技術的能力の向上に必要な諸條件のうちの一部をなすに止まるが、然しその缺如は、支那紡績労働者の技術的能力が低位におかれてゐることの主要な一根據として重視さるべきものである。この點は、後に問題とするところによつて明かにされるであらう。

(3) 一部の人々の間には、右のやうに、支那紡績労働者の労働能力或ひは技術的能力、ひいてはまたその『能率』の、必ずしも低くないことが認められてゐるが、然し、かゝる事實は決して今日の一般的な状態となつてゐるのではない。一般的に見るとき、彼等のかゝる能力・『能率』が今日なほ依然として低い段階にあることは争へない事實である。在支日本人紡績の當事者(筆者の接した若干の當事者)が語るところでは、これら日本人紡績に於ける女子労働者の『作業能率』(これは單に技術的能力のみによるものではないが、こゝにそれが中心的な役割をなしてゐる事が認められてゐる)は、今日、大體に於いて、日本内地紡績に於けるその七〇%乃至八〇%見當に當ると言はれてゐる。これも概略的な位地を示すものすぎず、また更にヨリ低く見られてゐる場合もあるが、然し一應、これらの見方のうちに、支那紡績労働者の労働能力或ひは技術的能力の位地を知ることができらるであらう。支那人紡績の場合には、これが更に劣つてゐるやうである。王子建氏によれば——一九三一、二年頃の事實とし

10) 王子建, 日本之棉紡織業, 民國24年, p. 114.

11) Pearse, *ibid.* p. 150.

12) British Economic Mission to the Far East, 1930—1931, Report of the Cotton Mission, London, 1931, p. 54.

て——支那紡績労働者の『能率』は、日本紡績労働者（何れも織布労働者ではない）のそれに較べ、在支日本人紡績の場合は七〇%、支那人紡績の場合は更に低く六〇%に過ぎないと推定されてゐる。<sup>10)</sup>

同様の事實は、更に他の調査者によつても屢々指摘されてゐるところである。例へば前記のベアースは、日・支の紡績業を視察した（一九二九年）結果からして、支那では『最も整備した工場條件の下に於いても、日本に於けるよりは二〇%多くの労働者が必要とされてゐるが、多くの工場では、この差は恐らく五〇%にも達するだらう』<sup>11)</sup>と述べてゐる。また一九三〇—三一年、同じく日本及び支那を訪れたイギリス極東經濟使節團も、その綿業報告書のなかで、同じやうに、彼等の視察した支那の紡績工場（支那人工場、日本人工場及び英人工場を含む）に於ける著しい低『能率』を抽象的にはあるが指摘し、これを次のやうに書いてゐる。即ち、これらの工場に於いては、『我々が日本で視察した工場よりも著しく能率が悪く、また労働者の熟練の程度も明かに劣つてゐた。これらの工場の労働者は、日本やランカシアの同様の工場に於けるより遙かに多く、而かも労働者は多いにも拘らず、彼等全體の能率は著しく劣つてゐた』<sup>12)</sup>と。

これらの事實を更に具體的な指標を以つて示すならば、我々は、これを、例へば機械單位當りの所要人員について見ることが出来る。昭和十一年頃の事實につき、大體同一の機械の下に於ける、日本内地紡績と在支日本人紡績との比較を試みたところによれば、精紡機（ハイドラフト紡機、二十手紡出）一萬錠當り兩番所要人員は、前者二三〇人乃至二六〇人に對し、後者は、三三〇人乃至三六〇人程度にして、後者が約四〇%近く多く、また織機（自動織機、細布標準物製織）百臺當りでは、前者四〇人乃至四五人に對し、後者は五〇人乃至六五人程度で、後者

13) 拙著、在支紡績業の發展とその基礎、昭和12年、pp. 70—71 參照。この點に關する支那人紡績の調査については、王子建・王鎮中、前掲書、pp. 129—143 參照。

14) 詳しくは例へば、Fong, H. D., *ibid.* pp. 89—99; 拙稿、前掲稿、p. 78. 等參照。

が約二五%乃至三三%多くを要してゐた。そして、これらの數字は、當時大體標準的なものと見られてゐたものである。<sup>13)</sup>

こゝに示した種々の見解や事實のうちには、それ／＼若干の差異が見出されるが、然し、何れの場合にも、支那紡績労働者の労働能力或ひは『能率』が、一般に可なり劣つてゐることを示す點に於いて一致して居り、従つてまたこのことから、彼等の技術的能力の低位にあることが推知される。<sup>(註)</sup>これが單に推知に止らないことは後に述べるところによつて、その根據を與へられるであらう。もつとも、こゝに示したやうな差異は、支那紡績労働者が、謂ゆる『本來』有つ能力を、そのまゝ反映してゐるのでないであらうことは注意されなければならぬ。然し、彼等の有つすぐれた能力は——事實さうでならば——勿論しかく評價さるべきであるとは言へ、それが充分機能してゐない現實の状態こそ、更に、確認されなければならぬ。

(註) 支那紡績労働者の技術的能力の劣ることは、更にその労働生産性の測度の低いことから知られる。然しこの點については、既に屢々問題とされて居り、また筆者も曾つて取扱つたところであるから、こゝでは立入らない。<sup>14)</sup>

(4) 而かも以上に於いては、比較の對象は主として日本に求められてゐるが、然るに、日本紡績労働者の技術的能力は——日本紡績業による世界制覇の喧傳にも拘らず——國際的には決して高くはなく、むしろ低い位地にあるのである。従つて更にかゝる事實から見るとき、支那紡績労働者の技術的能力は、國際的には一段と低水準にあるものと言はなければならぬ。一、二の指標を示すならば、我が紡績専門家の調査(昭和七年、富士瓦斯紡績會社技師の調査)によると、綿絲四〇番手紡出の精紡機(リングにて精紡部門まで)一千錠當り所要人員は、例へば、

支那紡績労働力の質的吟味

第三卷 一七七 第一號 一七七

15) 鹿村美久、本邦綿業に就て、昭和8年、p.16; International Labour Office, *ibid.* pp.207—208. なるは、この後者、即ち國際労働局の報告書に所載のものは、上記富士紡調査のものであるが、前掲鹿村氏(當時富士紡社長)の著書には、製品の種類について、綿絲「40番手」と明記されて

アメリカの三・四人、イギリスの四・〇人に對し、日本は六・一人であり、更に支那（上海の日本人紡績）では八・九人となつてゐる。<sup>15)</sup> またアトレーは、労働者一人當り精紡機受持錘數（リング、但し紡出番手は單に太番手とのみ記されてゐる）について、イギリスの五四〇—六〇〇錘に對し、日本は三四〇—四〇〇錘、支那は一四四—二二〇錘と示してゐる。<sup>16)</sup> 但し、このやうな差は、單に労働者の技術的能力の差のみによるものではなく、また調査結果の比較適性についても種々の考慮されるべき問題が存在する。<sup>17)</sup>（例へば、殊にイギリスと日本との比較では、日本紡績労働者の『能率』は、實質的には數字の差が示すほどに劣るものではなく、むしろイギリスのそれに較べ、さう距つてゐないとも言はれてゐる）。<sup>18)</sup> 然し、何れにしても、日本紡績労働者の『能率』が國際的水準から見劣つてゐることは否定されないところであり、而かも支那の場合、それが日本以下にあることは、その國際的地位が如何に低位にあるかを物語るものに外ならない。そしてこのことから、同時に、支那紡績労働者の技術的能力の低さをも推知することができるであらう。

支那紡績労働者の技術的能力が低位にあることは——それを完全な形に於いて捉へえないにしても——以上を示すところによつてほとん明かである。それでは、それは、何故このやうに低位におかれてゐるのであるか。この點については、從來論議されるところ必ずしも少くないが——その多くは斷片的なものであり——問題は、なほ充分明かにされてゐるとは言へないであらう。従つて、更に、問題の解明が試みられなければならない。

るのが、國際労働局の方には「40番手以下」となつてゐる。

16) Utley, F., Lancashire and the Far East, 1931, p. 384.

17) cf. International Labour Office, *ibid.* pp. 207—208.

18) 詳しくは、cf. Utley, *ibid.* pp. 196—200.

## (二) 低技能の社會的・經濟的根據

支那の紡績労働者が、近代的工業労働者として以上のやうな低技能者たることは——問題の所在をあらかじめ呈示するならば——基本的には、半封建的・半植民地的と言はれる後進的な機構的特質を有つこの國の社會・經濟の、そしてまたかゝる特質に規定された支那近代工業、ひいて當の紡績業の後進性に基づくものであり、更に言ひ換へれば、問題(技術的能力低位の根據)は、そこには、未だ、彼等を本來の近代工業労働者として成長せしめるための基礎的地盤が缺如し、或ひは後れてゐる點に存在する。従つて、かゝる地盤の缺如或ひは後進性を吟味することによつて、問題は答へられるであらう。然し、こゝに右の如き一般的な特質にまでさかのぼることには、いまそのところでなく、こゝでは、大體、支那近代的工業労働者の技術的能力低位の根據を要約的に問題としつゝ、これを當の紡績労働者についてより具體的に示し、以つて、彼等の技術的能力の低位を規定してゐる特質的な社會的・經濟的諸關係(根據)を明かならしめようと思ふ。これらの點は、然し、單にいまこゝに對象とする技術的能力の低位について問題となるばかりでなく、それは、更に後に取扱ふ労働意志或ひは肉體的能力の問題に於いても、それ／＼問題に應じて關聯するところを有つて居り、従つて、これらの問題に於いてもかへりみられなければならないものである。

以下、こゝに課題とするところの技術的能力の低位を規定してゐる個々の問題(根據)について明かにするであらう。

### 一、傳承的技能の固定性・限界

我々が、支那に於ける近代的労働者の技術的能力の低さに當面するとき、

19) 例へば、戸田義郎、前掲稿、D. 109 以下；王子建・王鎮中、前掲書、pp. 143—146等參照。

一般にこの國の勤勞者（特に農民、手工的従業者等）の有つすぐれた素質として屢々語られ、更に賞讃さへされてゐる『聰明さ』や『器用さ』或ひは『知的な労働力』と言ふことが、<sup>註</sup>對照的に想起される。それでは、本來このやうな素質の所有者が、近代の労働者として現はれると、むしろ低技能者として特質づけられるのは何故であるのか。その多くが女子である當の紡績労働者について見ても、この國の女たちは、古くから手工紡織やその他の手工的作業に従事し、その器用さは屢々また賞讃さへされてゐるのであるが、その彼女たちが、現實には技術的能力の低い紡績労働者たることは、また同様に問題たらざるを得ないであらう。

（註）こゝには、單に代表的な二、三の見解を示すに止めるが、これによつても、支那の勤勞者の知的・技術的能力が、如何にすぐれたものとして人々に映じ、或ひは承認されてゐるかを知らることができ、であらう。

リヒトホーフエン、は、支那人を、『極めて安價で而かも知的な人間労働力』と呼び、更に、彼等が機械生産に於いても極めて適應した能力の所有者であることを指摘して、次のやうに述べてゐる。機械技術は『支那人のために作られてゐるやうである。彼は、その最もむづかしい取扱ひ方を會得するであらうし、またその取扱ひ方が、全く絶えず一様に繰返されるならば、それを間違ひなく實行するであらう。人々は、彼を最良の機械工に、否、機械そのものにさへすることができ、更にまた『支那人は、人間といふ労働機械の理想を最も完全にみたしてゐる。蓋し、彼は機械の如く一様に労働するばかりでなく、同時に知的に労働するからである』（<sup>註</sup>圈點引用者）と。

ウィットフォォーゲルも、この見解を承認してゐるが、更に彼によれば、このすぐれた支那の労働力——その特質は園藝耕作型の支那農業の特質に求められてゐる——は、東亞の工業に於いて、今日までは、極めて顯著には實現されてゐないけれども、然しそこには『それにも拘らず、最高の能力を有つ天賦の労働力のこの巨大な集積が存在してゐることは疑ふことができない。その労働力の工業的發展は、今世紀の經濟史及び社會史上の偉大な出來事の一つとなるであらう』ときへ言はれてゐる。（これらの見解については、更に吟詠を要するであらうが、こゝでは立ち入らない。）

トーネイも、支那人のすぐれた知的・技術的能力を認めることに於いては同様であるが、然し彼に於いては、彼等支那人

1) Richthofen, F. v., China, II. S. 694; Schantung, S. 116. 但し Wittfogel, K. A., Wirtschaft und Gesellschaft Chinas, 1931, SS. 150-151 による。平野義太郎監譯，解體過程にある支那の經濟と社會，上卷，pp. 189-190 參照。

が近代工業の下に於かれた場合には、別の異つた評價が與へられてゐる。即ち、彼もまた、一應『支那には、すぐれた製品を作る異常な才能を有つた勤勉にして聰明な住民が存在する』ことを承認し、彼等の傳統的な日常生活に用ひられる製品の美事さを證へてゐる。然しながら、トーネイは、この『異常な才能』も新しいものへの適應に對しては困難を示してゐることを明かに認め、支那の『職人は、傳統に従つてゐる限りは間違ひないが、その埒外に出るときは、あらゆる基準を失つてしまふかの如くである』(圈點引用者)と言つて、彼等の適應性に否定的な見解をとつてゐる。而かもこのやうな見解は、必ずしも少くはない。そして、我々は、トーネイによつて指摘されてゐるこの後の事實こそ注意しなければならぬであらう。

我々は、この一見矛盾したやうに見える事實のうちに、總じて、古き關係から新しい關係への轉換期に於いては——一般に人々が、そしてまた——知的・技術的能力を高く評價されてゐる支那の勤勞者も(かゝる能力の如何は暫く問はない)、その轉換の過程に急速に適應することの困難であることを——このことは、理論的にも歴史的にも認められるであらう——讀みとることが出来るであらう。同時に右の事實は、單に傳承的なもの(支那に於ける手工的技術の)固定性・非發展性を示すものであると言へるであらう。そして、かゝる事實は、紡績勞働者の場合に於いても、また例外をなすものではない。而かも右のやうな困難さは、支那の如き社會的・經濟的發達の後れてゐる國にして(従つてまた、そこでは、工業化の過程に即應すべき知的・技術的水準——更に廣くは一般に文化的水準も——低い)、その上轉換の急激な場合には、一そう加重されるはずである。かくして、支那人の有つ謂ふところのすぐれた知的・技術的能力(手工的なそれ)も、それが新しい工業化の過程の下におかれるや——その單に傳承的な、従つてまたその固定性・非發展性の故に——トーネイの言ふやうな『あらゆる基準を失つてしまふかの如き』事態に遭遇せざるをえないこととなるのであらう。これらの事實のうちに、我々の吟味すべき問題が呈示されてゐるが、こゝに問はるべきは次のことである。即ち、彼等は、近代的工業勞働者としての知的・技術的能力

- 2) Wittfogel, a. a. O. S. S. 149—150, S. 152; 邦譯, 上卷, pp. 188—189, p. 191.
- 3) Tawney, ibid. p. 135; 邦譯, pp. 147—148.
- 4) Tawney, ibid. p. 114; 邦譯, p. 124.
- 5) Tawney, ibid. p. 114; 邦譯, p. 124.

の形成上、具體的に如何なる状態・關係の下におかれてゐるかと言ふことが、それである。(但しこゝでは、問題を近代工業との關聯に於いてのみ——それ以前の段階に遡ることは暫く措き——取扱ふに止めざるをえない)。

## 二、國民の智能水準の低位

一國の國民の、具體的には直接労働に参加する人々の智能水準が一定の高さにあることは、彼等が技術的にすぐれた近代的工業労働者として存在し、成長するための、最も一般的且つ直接的な基本的條件をなすものである。現に、近代的工業労働者の——そしてまた智能の高さをそれほど要求されない紡績労働者の如きに於いても——技術的能力の形成上、智能が重要な意義を有つてゐることは、先きに指摘したところである。然るに、支那に於いては、労働力の供給源たる國民(人口)の有つ智能水準、或ひは更に廣く近代的文化水準は、既に人々の知る如く極めて低位にあり、こゝに先づ、彼等の近代的工業労働者たることに對する一つの重大な障害が存在する。この事實は、基本的には、その基礎的地盤をなす支那社會・經濟の未發達・後進性に基づくものであるが、これらの點については、こゝに立ち入るまでもなく既に明かである。かくして、ここでは、國民の智能水準の發達は必然的に制約され、現に支那に於いて見出されるものは、正に、老大な國民の貧困と無智の集積である。

支那の國民が、如何に無學・無智の状態に放置されて居り、従つてまた彼等の智能水準、文化水準が如何に低位におかれてゐるかは、既に諸々の事實の示すところであるが、このことは、單に、この國に於る國民初等教育の著しい後れを一瞥するだけでも、凡そ理解しうるであらう。この初等教育の著しい後れは、彼等の近代的工業労働者としての技術的能力の低位的形成に直接關係を有つものとして、先づ注意さるべきものである。試みに、この



後れを示す一つの標識として、この國(以下の数字は滿洲國をも含む、蒙古・西藏は不詳)の就學兒童數を見るならば、一九三二年に於いて、約一二、二三千人——男子一〇、三七七千人、女子一、八四六千人——にして、その人口(約四四五、九九六千人)一、〇〇〇人に對する割合は、僅か二七・四人に過ぎない(舊國民政府教育部調査)。そしてこの割合は、四十ヶ國に近い世界主要諸國のうち、それが最低たる英領印度の二六・九人(一九三一年)と殆んど同じ最低の部類に屬するものである。右の約四十ヶ國のうち、大多數の國に於けるこの割合は、一〇〇人以上に達して居り、五〇人以下のものは三ヶ國を數へるに過ぎない。これらの調査の眞實性については、或ひはなほ吟味の餘地があるにしても、然し支那に於ける初等教育の著しい後れは、右の事實から充分窺知されるであらう。殊に女子の場合にはそれが一そう甚だしい。このことは、前記兒童數の内譯が示す如く、女子に對する初等教育は殆んど放棄されてゐるに近い状態である。また、支那に於ける右兒童數の割合は、ほど全支に亘るものゝ平均であるが、支那の主要工業地帯が存在し、その勞働力の多くを供給してゐる沿海諸省について見ても、この割合は、幾分高く現はれてゐる程度で、さう異つてゐない。而かも更に注意さるべきは、これらの就學兒童に於いても、その教育は極めて不完全にしか行はれてゐないことである。このことは、現に初等教育の實情が示すところであるが、例へば費孝通氏は、中支の一農村調査の結果に於いて『生徒の學問上の智識は、私が試みた限りでは、驚くべき程貧弱である』と述べてゐる。<sup>6)</sup>

支那に於ける國民初等教育のこのやうな著しい後れは、彼等國民の無智・智能水準の低位を物語るものに外ならないが、支那の近代的工業勞働力(更に廣く支那の勞働力)の供給源は、正に、かゝる民衆のなかにあるのであ

6) 申報年鑑(民國25年版), pp.1184—1185, p.1190 參照。

7) 日本內閣統計局, 列國國勢要覽(昭和10年), pp.172—173 參照; なほ, 前掲, 申報年鑑, p.1185 參照。

8) 詳しくは, 前掲, 申報年鑑, p.1190 參照。

る。而かも、後に見るやうに、この供給源の主要な地盤は農村にあり、かくしてまた、こゝに、支那の近代的工業労働者に於いては、今日なほ農村と未分化の状態にあることを一つの重要な特質としてゐることは更に注意されなければならない。

もとゞ、近代的工業労働者の技術的能力は、單に工場に於いてのみ與へられるのではなく、それは、廣く當該國民の智能水準・文化水準に依存するものである。高い智能を必要としないと云はれる紡績労働者の如きに於いても、ヨリ高い智能の所有者ほど、技術的能力のすぐれた労働者となりうることは、先きに我々の明かにしたところである。然るに、支那に於いては、労働者の源泉たる國民の智能水準・文化水準が右の如く低位にあることは、既に、すぐれた近代的工業労働者の創出に對する、一つの重大な基本的條件の缺如を意味するものに外ならない。(かゝる基本的條件の缺如、即ち無智は、資本の立場から見ると、また一定の『利用性』を有つものであるが、このことは、いさの場合一應別箇の問題であり、こゝでは立ち入らない)。彼等は、傳統の枠内にゐる限りは、すぐれた技能者であるにしても、それを一步出るとき、『あらゆる基準を失つてしまふかの如き』存在であることは、こゝにまた想起さるべきである。

紡績労働者の場合に於いても、勿論、右と同じところにその供給源を有ち、また同様の關係にあるものであるが、而かも更にこの場合には、充用労働者の多くは、ヨリ無教育な女子に求められて居るのであり、そしてこのことが、そこでは、特質をさへなしてゐるのである。現に紡績労働者の教育程度は極めて低く、このことは、具體的には、次の調査事例の示すところである。

- 9) 以上の支那に於ける無學・無智の状態に關し、更に詳しくは、例へば、cf. Lameon, H. D., *Social Pathology in China*, 1935, p. 187 ff.
- 10) 費孝通著(1939), 仙波泰雄・鹽谷安夫譯, 支那の農民生活, p. 60.

支那紡績労働者教育程度

(1) 上海A工場(昭和十七年調査)

(a) 文字理解の程度(人)

男 工 (%)	女 工 (%)	同 計 (%)	全然文字を解しえぬ者		姓名を讀みうるも書きえぬ者		姓名を讀み且つ書きうる者		數字を讀みうるも書きえぬ者		數字を讀み且つ書きうる者		數字・文字共に讀みうるも書きえぬ者		讀み書き共に自由になしうる者		合計
			人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	
27.8	40.6	34.2	1,406	41.1	3,393	99.5	3,393	99.5	1,199	34.9	4,592	134.2	1,342	39.5	6,464	190.1	3,855
100.0	100.0	100.0	1,406	41.1	3,393	99.5	3,393	99.5	1,199	34.9	4,592	134.2	1,342	39.5	6,464	190.1	3,855

(b) 就學の有無・程度(人)

男 工	女 工	合計	無就學者		就學者(就學年限)							合計	無就學者の割合(%)					
			人数	割合(%)	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年以上			小計				
160	192	352	1,352	38.4	51	14.5	58	16.5	34	9.7	24	6.8	19	5.4	22	6.3	3,855	10.1
100.0	100.0	100.0	1,352	38.4	51	14.5	58	16.5	34	9.7	24	6.8	19	5.4	22	6.3	3,855	10.1

(2) 上海B工場就學の有無・程度(%) (昭和十六年調査)

男 工	女 工	無就學者		就學者(就學年限)							合計						
		人数	割合(%)	一年	二年	三年	四年	五年	六年以上	小計							
199	211	1,123	56.2	44	22.1	66	32.7	27	13.3	24	11.8	19	9.4	22	10.9	1,900	94.8
100.0	100.0	1,123	56.2	44	22.1	66	32.7	27	13.3	24	11.8	19	9.4	22	10.9	1,900	94.8

支那紡績労働力の質的吟味

(3) 青島九工場識字者の割合(%) (昭和十四年調査)

	A工場	B工場	C工場	D工場	E工場	F工場	G工場	H工場	I工場	平均
男	二三・八	三八・〇	二一・〇	二〇・二	八・八	二五・〇	二一・〇	四〇・〇	二九・九	二七・七
女	八・〇	八・〇	二・四	五・八	一・八	三・八	一〇・〇	二〇・〇	一九・四	八・二

(4) 天津A工場就學の有無・程度(人) (昭和十六年調査)

	就 學 者 (就 學 年 限)								合 計	無就學者 の割合 (%)		
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年以上	其他				
男	二六三	五七	九七	一三四	七七	六二	八〇	二八	一一	五四六	八〇・九	三三・五
女	六一〇	二一	一八	五	一〇	二	七	〇	一	六四	六七四	九〇・五
計	八七三	七八	一一五	一三九	八七	六四	八七	二八	一二	六一〇	一、四八三	五八・九

(備考) 青島以外の分は、各當事者より提供された資料による。青島の分は、吉田美之、青島紡績労働事情、満鐵調査月報、昭和十五年六月、七七頁による。天津の就學者中、其他とあるは中等學校就學者。

これらの事實に見るやうに、彼等紡績労働者の教育程度は一般に著しく低く、特に女子の場合には、全然文字を解しえない者が、壓倒的部分を占めてゐるやうな状態である。その他のものに於いても、僅かに文字を解し、或ひは自己の姓名をやうやく書きうる程度のもものが少くない。紡績作業は、技術的に比較的單純なものであると言へ、かゝる低水準の智能を以つてしては、當然、その効果的な習熟に困難を伴ふことは免れない。現にその故に、これらの支那紡績労働者にあつては、技術の習熟は後れ、従つて熟練の度は低く、更に他の部面にもさまざまの障害が現はれてゐる。その技術的能力の低さが、無智によるところの少くないことは、既に當事者の経験

によつて認められてゐるところである。

而かも支那の場合、以上に見る如き無學・無智の民衆は、勞働力の供給源として、老大・過剰な存在をなしてゐるのである。そしてこのことはまた、勞働力の取得が容易である故を以つて、個別資本に對し、勞働力の合理的な陶冶・訓練を閉却・放棄せしめる重大な條件をなしてゐるのであり、こゝに、個別資本の側からも、彼等の技術的能力の形成は制約されざるをえないと言ふ關係におかれてゐる。この國の資本主義的未發達・後進性は、既に、勞働力保護のための社會政策的地盤の缺如を示すものに外ならないが、老大・過剰な勞働力の存在は、更にこの缺如を強めるものであることを、こゝに注意しなければならぬ。その具體的な事實は、のち更に問題とするであらう。

・三、支那近代工業・紡績業發達過程の特殊性による制約　支那の近代的工業勞働力に於ける精神的能力の、ひいては技術的能力の低位は、更に具體的には、この國の近代工業の發達過程に於ける、従つてまたその今日の段階に於ける特殊性によつて規定されてゐる。そしてこゝに見出される關係は、同時に、紡績勞働者の場合にも妥當するものである。

支那近代的工業勞働者の技術的能力の低位を規定してゐる、當の工業に於ける發達の特殊性は、それが、後れて非自生性的（外來的）且つ急激に創出されると共に、而かもその後の發達は、この國の後進的な特質によつて阻害され、畸型化され、かくして、そこには、西歐の先進工業國に見るやうな、近代工業の正常な發達過程或ひは傳統を缺如してゐると言ふ、これら一聯の關係のうちを求められる。そしてこれらの事實の意味するところは、

支那近代工業の發達過程自體は、また、そこに於ける労働者の技術的能力を合理的に陶冶し、向上せしめる地盤を、形成しえてゐないと言ふことである。一般に支那近代工業労働者の技術的能力が低位にあるのも、その基本的な一要因は、正に、かゝる點に存在する。

本來、すぐれた近代的工業労働力の形成・確立は、一定の經濟的基礎の上に、且つ時の經過を通じて、徐々に達成されるものである。従つて、前資本主義的支那に於ける勤勞者が、如何にすぐれた手工的技能を有つてゐるにしても、それは、そのまゝでは、直ちに近代的な機械生産に即應しうるものではない。殊に、彼等は、この國の傳承的な古い意識や慣習を身につけたまゝ、またその技術的能力(手工的技術的能力)も實は固定的な非發展的なものを以つて、急激な新しい轉換に當面したのである。而かも、彼等がその見慣れない機械の前に立つた當の近代工業は、右の如き性格を有つものである。かくては、彼等が、そこに急速に即應することは困難であり、従つてまたすぐれた近代的工業労働者たりえないことも、敢へて怪しむに足りない。そして、これらの點に於ける特殊性は、西歐の先進工業國が、その産業革命の過程を通じ、且つその後の發展に於いて示してゐる事實と對比するとき、ヨリ明白に理解されるであらう。<sup>11)</sup>

紡績業に於いては、高い智能や技術的能力を必要としないとは言へ、然し、こゝに於いても、右の如き關係はまた等しく存在する。労働者の優秀な技術的能力の形成は、この場合に於いても單純になしとげうるものではない。紡績労働者に於いても、支那の女たちは、手工紡績にすぐれた能力を有つてゐるとは言へ、それは、そのまゝでは直ちに機械紡織に對し必ずしも効果的には役立つものではなく、<sup>(註)</sup>また現に紡績労働者の技術的能力が劣つ

11) cf. Fong, H. D., *Industrial Organization in China*, 1937, pp.2-5; Cheng, H. E., *Die arbeitsmässigen Voraussetzungen für eine weitere Industrialisierung in China*, *Weltwirtschaftliches Archiv* (Kiel), März 1937, S. 266.

てゐることは、右の事實を物語るものに外ならない。

(註) 手工紡織にすぐれてゐる者にしても、彼等が、そのまゝでは直ちに有能な機械紡績労働者となりえないことは、印度の場合が興味ある例を示してゐると言へるであらう。印度は纖維工業の母國と言はれ、印度人の紡織技能も、論者により極めて高く評價されてゐる。曾つて前世紀の終り頃、紡績業の權威者、J・プラット及びH・リーの如きは、何れも、印度に於ける彼等の經驗を基礎として、印度の労働者の如く纖維工業に對して先天的な才能を有つてゐる者は、ランカシア以外には世界にどこにも居ない、と言ひ、從つて、この國に於ける新興の紡績業が新しい労働者を必要とする場合、印度人には極めて急速に技術を習得せしめることができる、と強調してゐたのである。<sup>12)</sup>

然し、印度の近代的紡績業のその後の事實が示すところによれば、かくも賞讃されてゐる『先天的な能力』が、そのまゝ役立つてゐるかと言ふに、むしろさうではない。今日の印度紡績労働者の労働能力或ひは技術的能力は、支那以下の低きさへ止つてゐるのである。このことは、次の如き事實から知りうるであらう。先きに採用した我が紡績専門家の調査(一九三二年)によれば、綿絲四〇番手紡出の精紡機(リングにて精紡部門まで)一千錠當り所要人員は、アメリカ三・四人、イギリス四・〇人、日本六・一人、支那(上海の日本人紡績)八・九人に對し、印度は實に一五・〇人と言ふ多數を要してゐるのである。<sup>13)</sup> またアトレーによつても、労働者一人當り精紡機受持錠數(リング、但し紡出番手は單に太絲とのみ記されてゐる)に於いて、イギリス五四〇―六〇〇錠、日本三〇〇―四〇〇錠、支那一四四―二二〇錠に對し、印度は更に少く、僅か一八〇錠と示されてゐる。<sup>14)</sup> これらの數字は、必ずしも嚴密な比較を示すものでないにしても、それは、印度紡績労働者の『能率』、そしてまた、その技術的能力が、著しく劣つてゐることを判斷せしめるに充分である。少くとも、こゝに、印度人の『纖維工業に對する先天的な才能』が發揮されてゐないことだけは明かである。そしてまた、これらの事實は、植民地印度に於ける近代工業・紡績業の性格を表現するものであり、ヨリ具體的には、印度の農民(こゝでも、農民は近代的工業労働力の重要な供給源をなしてゐる)や労働者の限りなき貧困と無智、或ひは労働者の劣悪な労働条件や生活条件を想ひみるなら、<sup>15)</sup> 容易に理解しうるところであらう。

支那の紡績業は、この國の近代工業としては早く創出されたものではあるが、然し、それも世界的には遙かに後

12) Vgl. Schulze-Gävernitz, a. a. O. SS. 162-163.

13) 鹿村美久, 前掲書, p. 16.

14) Utley, F., ibid. p. 384.

15) 例へば cf. Utley, F., ibid. p. 374 ff; Butler, H., Problems of Industry

れて居り、またそれは、他の諸工業と同様に自生的に發達したものでなく、外來的に移植されたものである。従つてこの場合に於いても、また、單にかゝる點だけから見ても、労働者の技術的能力形成のための地盤・傳統的基礎（例へば次に見るランカンシアに於けるやうな）を缺いてゐることが知られる。而かもその後の發達は、種々の制約條件（植民地的諸關係並びに殘存する前資本主義的諸關係）によつて阻害され、従つてそこには、労働能力・技術的能力の形成上にも、幾多の障害を内在せしめてゐる。この點については、特に支那紡績業に於ける労働條件並びに謂ゆる勞務管理上の諸問題を吟味しなければならないが、これらの點は、後にやゝ詳しく取扱ふところであり、それによつて具體的に明かにされるであらう。たゞ要約的に指摘すれば、そこに見出されるものは、要するに、労働力の早期的・植民地的濫費であり、本來の近代的工業労働力の保護・培養の如きは、未だ資本の積極的な課題とはなつてゐないことである。而かも、次に問題とするやうに、そこに於ける労働者の多くは、農村より供給される出稼型の且つ年少な女子であり、従つて彼女たちは、技術的に充分熟練しないうちに、他の新たな労働者と相互交流するが如き存在である。のみならず、そこには、現に半農半工的な労働者さへ少くない。これらの點は、また支那紡績労働者の労働能力・技術的能力形成上に於ける重大な制約條件をなすものであるが、かゝる諸關係の下にあつては、彼等のうちに、すぐれた技術的能力が形成され、且つそれが、蓄積された傳統的な力となつて作用することは、凡そ望みえないことであらう。現に、支那紡績労働者の技術的能力が如何に低位にあるかは、先きに詳しく見たところである。

このやうな支那紡績労働者の技術的能力形成過程に於ける特殊性・後進性に規定された彼等の技術的能力の低



位は——日本の紡績労働者とはなく——イギリスの紡績労働者と對照することによつて、更に明瞭に理解される。會て前世紀の末頃、シュルツェーゲーファーニッツは、先きにも言及したランカシアの紡績労働者と歐洲大陸のそれとの比較に於いて、前者のすぐれた點の一つとして彼等の有つ機械制工業労働者としての知的な性質 (geistige Eigenschaft) をあげ、これを次のやうに述べてゐるのである。『イギリスの労働者をして、特に機械使用の労働によく適應せしめてゐるのは、一種の知的な性質であるが、それは、殆んど百年に亘る發達の結果はじめて得たものである。ランカシアに於いては、現在の職工の父ばかりでなく、祖父もまた、既に機械紡績や機械織布に従事してゐたのである』『北英地方の労働者は、機械のために生まれ、またそのために教育されてゐるのであり、彼は、大陸の手工的労働には打ち勝てないにしても、然し、進歩した機械を監視する場合には、何處に於いても、世界最廉 (『能率』高きため、賃銀は高くとも、結局生産費は低廉となるの意——引用者) の労働者である』<sup>16)</sup>と。こゝに、イギリスの労働者、そしてまた紡績労働者の有つ技術的にすぐれた傳統的な力を見ることができらうであらう。そしてこの成果は、こゝにシュルツェーゲーファーニッツも言ふ如く、イギリスのながい工業發達過程のうちに形成され、獲得されたものである。

このイギリス紡績労働者のすぐれた技術的能力は、今日に至るも依然變らない。先年イギリスの紡績業を視察した我が紡績専門學者は、その視察報告のなかで、このことを、日本の紡績労働者と對照しつゝ次のやうに書いてゐる。即ち、イギリス紡績労働者の長所として、『之と(イギリス紡績労働者の有つすぐれたイギリス人氣質を指す——引用者)と同時に考へらるゝ問題は作業者全體の技術のレベルである。英國にては一度紡織に志ざし、身をこ

の方面に投じたものが矢鱈に轉職することが稀である。……(従つてまた)彼等自身の好む部署に働き得、技術をよく體得出来るのである。日本の寄宿制度勤続年限に比較してその技術の上に及ぼす影響果して如何ばかりか。かくしてまたイギリスの紡績労働者に於いては『こゝに永年の勤続者を出すことゝなり、併せて彼等の技術は益々堂に入つて來ることゝ思惟するものである』<sup>17)</sup>と。このイギリス紡績労働者に對する日本紡績労働者の技術的能力の低位は、我が紡績業者によつても更に明瞭に表明されて居り、即ち『やゝ以前に於いてあるが——日本の紡績労働者の移動の激しいこと(大正二年當時、九月月位で一交替したと言ふ)と關聯して、このやうな状態の下では『到底技術の熟練、仕事の進捗といふことを期することは出来』ず『英國の如き親も兄弟も子も孫も代々職工で技術に熟練して居るものと比較して、實にお話にも何にもなつたものではない』とさへ言はれてゐるのである。<sup>18)</sup>この場合、現象的には移動の激さは勿論問題とさるべきものであるが、更に、日本紡績労働者のかゝる技術的能力の低位を規定してゐる基本的な根據がどこにあるかは、既に人々の知るところである。

日本の紡績労働者にして右のやうな状態にあるのである。日本以下の劣悪な後進的諸條件の下にある支那の紡績労働者が、その技術的能力の形成をヨリ制約され、従つてまた、それが必然的にヨリ低位におかれざるをえないことは、推して知りうるであらう。

四、近代工業労働者・紡績労働者と農村との結合關係 支那近代工業労働者の労働能力・技術的能力の形成に關して、更にこゝにとりあげらるべき基本的な問題は、その充用労働力の重要な供給源が農村——それは半封建的な農業を基礎とする極めて窮乏化した農村である——にあり、かくしてこの點に於いて、支那の近代

17) 新井幸長、英國の綿業を視る、昭和5年、pp.30—31, p.35.

18) 阿部房次郎、我國の紡績業に就て、大日本紡績聯合會月報、大正2年10月、pp.8—9.

工業労働力は、未だ農村(農民)と密接な結合關係を有つてゐると言ふことである。勿論、かゝる労働力がすべて農村から供給されてゐるわけではなく、都市の居住者(言はゞ本來の都市居住者、農村との關係を既に比較的早くより全く離脱した移住者等)も、またその一供給源をなしてゐる。然し、支那の農村が、今日なほ、支那の近代的工業労働力の重要な供給源たることは、種々の事實が示してゐるところである。そしてこれらの農村からの労働者は、都市の工場で働きながら、郷里の農村に、なほ、歸るべき家を(同時に恐らく極めて僅かながらも土地を)、家族を有つてゐる場合が少くない。そこには『彼等(工場労働者——引用者)の幾何かは、工場で働きながらも、なほ一時都會に出て來た農民のまゝである』<sup>19)</sup>と言はれるやうな労働者を見るのである。<sup>20)</sup>

問題は、これらの事實の意味するところであるが——他の問題は暫く措き——そのことについていまこゝに我々の問題として指摘すべきことは、かゝる點に於いても、これらの労働者は本來の近代的工業労働者として成長するための地盤を缺いて居り、従つてまた、彼等に要求される技術的能力の形成も、必然的に制約されざるをえないと言ふことである。即ち、現に彼等の技術的能力が低位にあるその主要な一因は、また、かゝる點に求められるのである。而かも、彼等は、既に明かにしたやうに無智を以つて特徴づけられる農民なのである。

紡績労働者の場合に於いても、彼等と農村との密接な結合、それによる彼等の近代的工業労働者としての成長に對する制約は、右に述べたところと同様の關係にある。否むしろ、紡績労働者は、特に農村と密接に結びついてゐる點に於いて、かゝる結合關係の代表的な型をなしてゐると言はなければならぬ。このことは、先きにもふれた如く、紡績労働者の多くは——日本に於けると同じやうに——農村から供給される年少な出稼型の家計補

19) Tawney, *ibid.* p. 157; 邦譯, p. 173.

20) これらの點に關して、更に詳しくは、戸田義郎、支那工業労働者と農村との結合に關する實證的研究、支那研究、昭和14年3月；橘樸、支那社會研究、昭和11年、pp. 305-310、等參照。特に前者に詳しい。

充的、女子労働者であり（但し性別構成は、次に言及する如く、中北と北支とは異なる）、短い勤続年限を以つて相交流するといふ事實に示されてゐる。農村がこれらの労働者の主要な供給源をなしてゐることは、募集の行はれる場合、農村はその主要な地盤となつてゐること、また現に工場で働いてゐる労働者の出身地を見ても農村地方から（註一）のものが多くことなどから知られる。更に紡績労働者に於いても、かゝる出稼型の労働者は單に女子の場合に於いて見られるばかりではなく、男子の場合にも同様の傾向が少くない。殊に北支の紡績業に於いては、從來、女子労働者より男子労働者が多く（北支型）、この點に於いて——それは、支那の紡績業に於いても、男子労働者より女子労働者の多い中支型と對照される——一つの特異性を示してゐるのであるが、これらの男子労働者は、紡績労働者としてその生活を維持し繼續してゐるかと言ふに、必ずしもさうではない。かゝる事實は、右に述べた支那の近代的工場労働者一般に關する事實からも推知されるところであるが、現にまた、紡績工場の當事者が語つてゐるところであり、或ひは更に、男子の場合に於いても、女子の場合と同じくその勤続年限が短く且つ歸農の事實の見られることなどが、そのことを物語つてゐる。（註二）

（註一）紡績労働者の出身地別調査については、總括的な調査を缺くため、断片的なものを示すに止めざるをえないが、最近に於ける事實について見れば、例へば、上海A工場に於いては（昭和十七年調査、労働者數一、六七四人）、上海土著人（浦東を含む）は約二五%に過ぎず、その他は何れも各地方から來集したものである。殊に江北出身者（江蘇省揚子江北部）多く、それは約六〇%を占めてゐる。またB工場に於いては（昭和十六年頃調査）、上海土著人は一二・五%を示してゐるに過ぎず、他方この場合に於いても、江北出身者は右と同様に多く、やはり約六〇%に達してゐる。江北地方は著名な労働力創出地として知られてゐるところであるが、そのことが、こゝにも明瞭に現はれてゐる。また上海の紡績工場に於いて右の如く地方から來集した者の多いことは、時期をやゝ遡つても、ほゞ同様である。<sup>21)</sup>更に青島の紡績九工場の調査（昭和十四年

21) 宇高寧、支那労働問題、大正8年、pp. 168—169, p. 329; 長永義正、支那經濟物語、昭和4年、pp. 289—297; Fong, H. D., Cotton Industry and Trade in China, p. 115, 等参照。

調査、労働者数一七、四〇九人）によれば、青島市出身者四〇・六%にして、他は大牛山東省各地の出身者である（但しこの場合には、調査當時、日支事變後の治安不良のため、農村地方よりの出身者が、平時より少いことが指摘されてゐる<sup>22)</sup>）。天津の紡績工場について見ても、土着人の少いことに於いては、大體同様の事實を示してゐる<sup>23)</sup>。以上に見るやうな、當該都市以外の各地方を出身地とする労働者が、すべて農村から供給されたものとは言へないであらうが、然しその大半が農村から送り出されたものであることは、推知するに難くないであらう。

（註二）紡績労働者の勤続年限の短いことは、次の調査事例に示されてゐる。例へば青島の紡績七工場の調査（日支事變直前頃の事實）によれば、平均勤続年限は、女子一年五ヶ月、男子二年二ヶ月の程度であり<sup>24)</sup>、また上海のA工場の場合でも（昭和十七年調査）女子一年六ヶ月、男子二年と言ふ如きである。天津のA工場の場合は更に短く（昭和十六年調査）、女子一年二ヶ月、男子一年一ヶ月に過ぎない<sup>25)</sup>。但しかゝる事實は、これらの労働者が、何れも右の如き年限を以つて完全に工場を去り、歸村してしまふが如きことを意味するものではない。彼等の間には、轉々として工場を移動してゐる事實があるからである。然し、前記の短い勤続年限は、同時にまた女子のみならず、男子の場合に於いても彼等の出稼型労働者たることを示すものと言つてよい。頻々たる移動そのことも、彼等の性格を示すものとして注意するべきである。これらの點は、のち更に述べるところによつて、ヨリ明かにされるであらう。

紡績労働者に於いては——他の場合にも多かれ少なかれ見られるところであるが——彼等は、單に出稼型といふ意味に於いて農村と結合してゐるばかりでなく、その上更に、現に工場労働者たるものが、なほ多分に半農半工的性質を有つて居り、この點に於いて、彼等は一そう強く農村と結合してゐることを注意しなければならぬ。かゝる事實は、上海の如きに於いては比較的少いやうであるが、既に青島・天津（何れも北支の代表的紡績業地）に於いては或る程度見られ、更に、労働者を附近の農村に得てゐる地方（支那内地）に於いては、それが可なり著しい現象となつて現はれてゐる。王子建氏等の述べてゐるところによれば、特にこれらの地方的紡績工場にあつ

22) 吉田美之、青島紡績労働事情、滿鐵調査月報、昭和15年6月、pp.81—82.

23) cf. Fong, H. D., *ibid.* p. 115; なることは、筆者の手入せる資料からも知られる。

24) 吉田美之、前掲稿、pp.71—72.

ては「工場が農村地方に設けられてゐるため、労働者の大部分は當然附近の農村から來てゐるのであるが、彼等は、農閑期には頻りに工場にやつて來て仕事を求めるのに對し、一たび農繁期に至るや相携へて工場を休み農耕に従事する<sup>25)</sup>」<sup>26)</sup>と言ふ如き状態である。<sup>27)</sup>かゝる事實は、單にこゝに言ふ農村地方の工場に於ける特有の現象ではなく、多くの労働者が附近の農村から來てゐるところでは、例へば中支の一主要工業地たる無錫の如きに於いても——幾何か程度の差こそあれ——なほ、極く同様のことが見られるやうである。

(註) かゝる現象を、更に具體的に例證するものとして、次の如き事實があげられる。これは、江蘇省太倉縣に於ける一農村の調査報告が示すところであるが『調査の結果に従へば、農業外労働の主たる働き場所である利泰紡績の職工となつてゐる三一名に就いて觀ると、内一四名は一年を通じて勤務をなす純然たる工場労働者となつてゐるが、残りの一七名は四ヶ月、半年或ひは八ヶ月等、一年の内或時期のみ工場に働いて居て、他の時期は農業耕作を行ふと言ふものがある……』

支那の紡績労働者は——特に内地のそれは——正に、右の如き農村との結合關係の下にある労働者である。紡績作業が、技術上たとへ比較的單純なものであるとは言へ、然しかゝる状態の下に於いては、また、それに充分熟練し、技術的能力を高めることの困難なことは、凡そ明かである。(未完) (二六〇二・一一)

25) 上海・天津の場合は、筆者の入手せる資料による。

26) 王子建・王鎮中、前掲書、p. 145.

27) 滿鐵上海事務所調査室、江蘇省太倉縣農村實態調査報告、昭和15年、p. 101.

京都帝國大學經濟學部内

「東亞經濟研究所」要項 (昭和十五年十一月十日設立)

- 一、東亞經濟研究所ハ東亞經濟ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 二、東亞經濟研究所ノ事務所ハ京都帝國大學經濟學部内ニ之ヲ置ク
- 三、東亞經濟研究所ハ左ノ事業ヲ行フ
  - 一、研究雜誌『東亞經濟叢書』ノ發行
  - 二、研究叢書『東亞經濟叢書』ノ發行
  - 三、研究報告 特殊問題ニ關スル外部ヨリノ研究受託
  - 四、研究受託 特殊問題ニ關スル外部ヨリノ研究受託
- 四、其他當所ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業
- 五、東亞經濟研究所ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 一、所長 經濟學部長ニ當ル
  - 二、評議員 經濟學部教授ノ全員ヲ以テ之ニ充ツ
  - 三、編輯委員 評議員會ニ於テ選定ス
  - 四、會計委員 評議員會ニ於テ選定ス
  - 五、東亞經濟研究所ニ研究員ヲ置ク事ヲ得
- 六、東亞經濟研究所ノ資産及會計ノ決定ニ依ルテ基本財産トシテ基本財産トス
- 七、基本財産及事業ヨリ生スル收入並ニ委託研究費ヲ以テテ年度ノ剩餘金ハ之ヲ基本基金ニ繰入ル、モノトス
- 八、役員ハ總テ無給トス
- 九、毎年度ノ豫算及決算ハ評議員會ニ報告シテ其ノ承認ヲ經ルモノトス
- 一〇、東亞經濟研究所ノ事務ヲ左ノ如ク分擔ス
  - 一、庶務 二、會計 三、編輯 四、資料

本誌の購讀會員(一ヶ年分金參圓五拾錢)は東亞經濟研究所(振替口座京都一九六七四番)へ申込まれたし

昭和十八年二月廿三日印刷  
昭和十八年二月廿八日發行

定價金 壹圓

郵税 十二錢

編輯兼  
發行人

松尾哲彦  
京都市左京區田中里ノ  
内町一三

印刷人

橋本岩太郎  
京都市上京區上樁木町  
通千本東入

印刷所

眞美印刷所  
京都市上京區上樁木町  
通千本東入 (電話一九〇〇)

發行所

京都帝國大學經濟學部内  
東亞經濟研究所  
振替口座京都一九六七四番  
日本出版文化協會會員番號第二二〇〇七一號

配給元

日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町  
二丁目九番地

發賣所

書肆 有斐閣  
東京市神田區神保町  
二丁目十七番地  
電話九段(33) 〇三三三番  
〇三三三番  
振替口座東京三七〇番

廣告料	一冊	金壹圓	郵税十二錢
	四一ヶ年	金四圓	郵税共
一頁	金貳拾五圓		